＜言　葉＞

幼児のイマジネーションや豊かな感性を育てる援助のあり方
－絵本の読み聞かせをとおして－

宜野湾市立普天間幼稚園　教諭　城間ハル子

目　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 43
Ⅱ　研究目標 …… 44
Ⅲ　研究仮説 …… 44
Ⅳ　研究の全体構想図 …… 44
Ⅴ　研究の内容 …… 45～54
1　絵本の教育的意義 …… 45
（1）幼児期の特性と絵本の意義 …… 45
（2）絵本とは、何か？ …… 45～46
（3）幼稚園教育における絵本の位置づけの歴史 …… 47
（4）絵本の教育的意義 …… 48
（5）園児の実態 …… 48
（6）絵本に関するアンケートから …… 48～49
2　読み聞かせについて …… 50～53
（1）読み聞かせとは？ …… 50
（2）読み聞かせを盛り上げる工夫 …… 50～52
（3）読み聞かせで育つもの …… 52
（4）幼稚園教育要領と読み聞かせ …… 53
（5）読み聞かせによる心の発達 …… 53
3　感性について …… 53
（1）感性とは？ …… 53～54
（2）幼児の感性の世界 …… 54
Ⅵ　保育実践（保育指導案） …… 55
1　活動名 …… 55
2　ねらい …… 55
3　保育仮説 …… 55
4　指導観 …… 55
5　教材観 …… 55
6　三組園児の実態 …… 55
7　保育の流れ …… 56
8　本時の実践記録 …… 57
事例１　Ｋ君の変容を追って …… 58
事例２　「幼い日絵本と出会う」２２歳のＴさんの絵本体験 …… 60
Ⅶ　研究の成果と今後の課題 …… 61～62
1　研究の成果 …… 61
2　今後の課題 …… 61
3　終わりに …… 61～62
Ⅷ　主な引用文献・参考文献 …… 62

＜言　葉＞

幼児のイマジネーションや豊かな感性を育てる援助のあり方
－絵本の読み聞かせをとおして－

宜野湾市立普天間幼稚園　教諭　城間ハル子

Ⅰ　テーマ設定の理由

現代社会は、科学技術の進歩により、携帯電話の普及やインターネット，宇宙開発，遺伝子操作等目まぐるしく変化している。その中で、子供たちを取り巻く環境も当然変化してきた。情報化の進展により映画，テレビ，漫画等の様々なメディアから情報が氾濫し、さらに、都市化、少子化、核家族化が進む中、人間関係の希薄化が叫ばれている。また、幼児の直接的環境である家庭環境の悪化や価値観の多様化により親の意識も変容し、地域のコミュニティーも喪失した。このような社会環境の中においては、欲しい物は何でも手に入り、物質的には豊かになった反面、精神的な心の貧しさが問題になってきている。このような環境の下で幼児の豊かな感情、人とのかかわりを持つ力、物事に対する思考力や表現力等の発達の姿も歪んできたといわれている。

このような社会変化への対応として、平成１０年に幼稚園教育要領が改訂された。今回の改訂では、平成元年の教育要領を基本とし、これを充実・発展させている。平成元年の改訂で、言語の領域が「言葉」の領域に変わったことは、生きる力の基礎を育むという今回の改訂にも深く関わっている。ちなみに、この「言葉」の捉え方であるが、「言葉にならない言葉」、「身振りや表情など」、「つぶやきのようなもの」、「心がゆさぶられたこと」、「喜び感動したこと」等も話し言葉として大事であるとしている。

つまり、話したり聞いたりすればよいという表面的な行動現象ではなく、心が通じ合う、心が触れ合う、心を通わすためのコミュニケーションの道具として言葉が重要になってくるということである。

ところで、幼児の発達状況について調査研究を行い幼稚園教育要領の改善に資することを目的として文部省幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議の実施した「幼稚園教育に関する実態調査」では、「間接情報のみで生の体験に乏しい幼児」、「基本的生活習慣ができていない幼児」、「自発的に遊べない幼児」の増加等の問題が指摘されている。

今、流行のキレルという行動を考える時、上記のような社会的発達や感情の発達の基礎に起因するように思う。そして優しさ、心の豊かさ、感情のコントロール、自分を表現する言語能力の欠如等に、起因しているような気がする。

「人間関係」や「表現」の領域とも関連してくるが、言葉というのは、自然や人や物に触れるなどして、感動する心とか心が動かされるという経験をたくさん積んでいくことで、そこでイメージ化されて発露していく場合がたくさんある。「経験したことを表現する喜びを積み重ねること」が、幼児の感性の発達を助長するのである。

本園では、週１回の絵本の貸し出しや毎日の読み聞かせを保育の中で位置付けている。しかし、幼児の言葉の発達は個人差が大きく、表現の仕方が自己本位で感じたことや見たことを表現できない場面が多々ある。

そこで、効果的な絵本の読み聞かせをすることにより言葉に対する感覚を養い、イメージを豊かにし、表現する充実感を味わわせることができると考える。絵本の読み聞かせによって想像上の世界に思いをめぐらせ、不思議さを感じたり、驚き、感動を覚えたり、悲しみや悔しさなどの気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知ることができるとかんがえる。
そして、その内容と自分の経験を結び付けることで蓄積されたイメージは豊かな感性へと成長していく。と同時に、読み聞かせは、子どもに愛を手渡すことであり、心と心の架け橋を作ることである。共通の感動を共有するということは、心の交流を図る大事なコミュニケーションの場でもある。豊かな心をつくり、豊かな表現力へとつなげる読み聞かせは保育の中で重要な位置を占めていると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究の目標

絵本の読み聞かせを通して、感動を共有し、豊かな心や表現力、感性はどのように育っていくかを探る。

Ⅲ　研究仮説

1　幼児の実態や発達段階に即した効果的な絵本の読み聞かせを通して感動体験を共有し心を通

わせることで豊かな心や感性が育つであろう。

2　パネルシアターやペープサート、エプロンシアター等の絵本教材の活用と工夫を図ることで幼児の興味・関心を喚起し、豊かなイマジネーションや感性が育つであろう。

Ⅳ　研究の全体構想図

日本国憲法
教育基本法
幼稚園教育要領

園教育目標
◎じょうぶな子ども
◎仲良く遊べる子ども
◎考える子ども

幼稚園教育の基本
―環境による教育―
幼児期にふさわしい生活の展開
遊びを通しての総合的指導
一人一人の発達の特性に応じた教育

本園の幼児の実態
○素直であかるい
○自分の思いをうまく伝えられない
○集中力，持続力、に乏しく遊びに深まりがみられない

本年度の重点目標
豊かな感性を育てる援助のあり方
○意欲的に関わって，遊べるように環境を工夫する
○基本的生活習慣を身につけさせ

社会からの要望
人間関係の希薄化
コミュニケーションの喪失
精神的，心の貧しさへのた

目指す子ども像
感性が豊かで表現力のある子
絵本大好きな子
想像力があり語彙が豊富な子

研究目標
絵本の読み聞かせを通して感動を共有し豊かな心や表現力・感性はどのように育っていくかをさぐる。

教師の願い
それぞれの個性を持った一人一人の子どもの心と向き合い、一人一人を知り、読み聞かせを通して感性を育て自ら生きようとする自主性につなげていきたい。

研究仮説
○幼児の実態や発達段階に即した効果的な絵本の読み聞かせを通して感動体験を共有し心を通わせることで豊かな心や感性が育つであろう。
○パネルシアターやペープサート、エプロンシアター等の絵本教材の活用と工夫を図ることで幼児の興味・関心を喚起し豊かなイマジネーションや感性が育つであろう。

内容①　理論
絵本の教育的意義
読み聞かせについて
感性を捉える。
内容②　方法
イマジネーションが育つ読み聞かせの効果的な方法
内容③　育ち
読み聞かせによって育つイマジネーションや感性の育ちを探る。

発達段階を考慮した、読み聞かせ

生きる力
読み聞かせは安心感と愛されていることの喜びを幼児に感じさせると同時に豊かな感性を育て豊かな心情や思考力の芽生えを助け感動を伝え合い共感しあうことにより親しみや畏敬の念が育ち生命を大切にする気持ちを育てていく。

絵本教材を工夫した、読み聞かせ

V　研究内容

1　絵本の教育的意義

(1) 幼児期の特性と絵本の意義

幼児期は生活や遊びの中で，「人間に対する信頼感」「自発性」「意欲」「豊かな感情」「物事に対する興味，関心」「思考」「表現力」「運動の、能力」の資質や能力が培われる時期である。すなわち，幼児期は人間形成の基礎となる原体験を中心に、将来人間としていきていくための基礎を確立していく時期だと言うことができる。

幼稚園においては，教師や，他の幼児たちと，生活を共にしながら，感動を共有し、イメージを伝えあうなど、互いに、影響を、及ぼしあいながら、言葉に対する興味や関心を持ち言葉を獲得しながら表現する喜びを味わっていく。「絵本」は、時空間を越え、想像の世界へ幼児をいざなうと共に、話しを聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚を養うことができる。さらに情緒の安定を図り、豊かな心情、豊かな人間性を養うことのできる豊かな教材である。想像の世界の中で、無意識のうちに絵本の主人公と自分を重ね、主人公のすることを自分の心の中で体験していく。(イマジネーション)、絵本の世界の中に、自ら入って、自分なりの考えで想像したり、イメージしたりするということは、主体性を育てることになり、人間形成の基礎を培う幼児期に、絵本は、大切な間接体験になる。

(2) 絵本とは何か？

絵本にはいくつかの捉え方がある。その絵本の捉え方について以下に述べる。

①人が生まれて初めて出会う本である。

②食物が身体を育てるように、絵本は心を育てるものである。

③絵を読み取っていくだけでも、ストーリーが理解できるように、作られている。

④子供文化として、位置づけられ遊びや、生活の中に生きている。

⑤絵と文が融合しあって、ひとつの世界を創り出している。

⑥たくさんの種類がある。「物語絵本」「昔ばなし絵本」「言葉絵本」「童歌絵本」「科学絵本」「知識絵本」「図鑑絵本」

⑦自分のしたことや、見たことや、感じたことが、追体験できる。

⑧知らなかったことを、知る喜びをあたえてくれる。

次に、絵本の特性についてであるが、その特性についても様様な視点から捉えることができる。

① 絵本は、１冊１冊が、作者からのメッセージであり、命が生きづいている。

例えば、ヘレン・バンナーマンの『ちびくろさんぼ』は、作者自身が、ふるさとに残して来た子供に、書き送った母の愛のメッセージであり、同じように息子の為に書いたというバージニア・リー・バートンの『ちいさいおうち』は、田舎の家の周りに、工場が建ち、電車が走り・・・・と、現代の文明の危機、環境汚染を描いている社会的テーマの作品である。

斎藤隆介さんの『半日村』は、人間の優しさは、とてつもない大きな力になることをつたえながら、人間にとって何が大切かを心の奥に染み込ませる。

② 固定的に捉えられない、いろいろなジャンルが、秘められている。

③ きわめて教育的である。

(図１・絵本の教育的意義)

④ 意外性(子供たちをのびのびとさせる)があり、時にはナンセンスであることもある。

⑤大人と子供が通じ合う媒介の性質を持っている。(子供の独自な心の世界に、深く大人が自分の世界をいいあらわして、その心で語りかけ訴えている。)

⑥ 作者の深い思いが、表現されている。

(例、斎藤隆介の『八郎』＝秋田弁で語ることで地方の言葉や文化を大切にする思い)

⑦ 子供たちの世界を深く受け止めて、子供たちと向き合っている。

⑧ 人間の根源的なあり方、意識や感性をうたいあげている。

⑨ 絵本は、それぞれの民族の固有の独自な文化、その民族の魂を子供たちに伝える。

⑩幼児向けの簡潔な文章にまとめられている。

⑪　文学であり、美術であり、科学である。

⑫　読むと心がしなやかになる。

つまり人間が人間であるために、一番大事な情緒と想像力と知恵が、一番単純な、一番わかりやすい、一番使いやすい形で、織り込められているのが絵本なのである。絵と言葉の織り成す物語が、子供の心に、直接働きかけ、すぐに、その成果が見えてくるというわけではないが、幼い心に、感性という名の種を蒔く仕事をしてくれる。それが絵本なのである。絵という見えるものと言葉という聞こえるものとが重なって、具体的なイメージが生まれ、想像力が刺激され、共感、期待、不安、安心、などの感動を呼び、喜びや悲しみを味わうことができる。このようにして絵本は、感性を育てていくものである。

次に絵本の存在について述べる。

人間は、一人では生きられない社会的動物であるといわれるが、その社会的動物が人間として、成長していくためには、その発達過程の関門に用意された発達課題をクリアしていかなければならない。元上野動物園園長の中川志郎氏は、チンパンジーの成長過程を親子密着の時期、子供グループの時期、独立の時期に、分けて話している。また、平井信義編集『読み聞かせでのびる子ども』の中で木口　満氏は、人間についても基本的には同じだと述べている。この三つの過程の中で人が人らしく成長していく土台を形成する最も重要な時期が親子密着時代だとしている。

この人間対人間の関係の中で、要となるのが信頼関係である。その信頼感は親子密着時代の授乳、抱きしめ、おむつ交換、沐浴、語りかけ、遊びを通して、親子の心の絆が形成していく過程で醸造されるのである。

つまり、親子密着時代は、スキンシップの時代であるといえるが、そのスキンシップの媒体の一つが、「絵本」だと、言われているのである。「知」「情」「意」の全てが、トータルに包まれた「心の遊び」へと、子供を誘い、その「心の遊び」の中で「真」「善」「美」を感じる心、人間として一番基本的な心を無意識に、ごく自然に自分自身の中に深く、豊かに、育てていくのである。子どもは、絵本の世界の中で知・情・意・の全ての能力をフル回転させながら極めてメンタルな心の遊びを体験し人間としての土台となる心―生きる姿勢の土台―を形成していくのである。

それが発達過程における絵本の存在価値だといえる。絵本は世代の枠を越えてその市民権を大人の世界にまで広げ、豊かな発想、優しい心、美しい世界へと誘い遊び相手にもなってくれる。幼児期の子供に大切なことは「あーおもしろかった」「あー楽しかった」「どうしてだろう？」「不思議だなー」などの感動を直接、間接体験により、多く積むことが大切である。決して知識や躾をする事ではない。目先の見える事を子供に期待するよりも子供の見えない部分を育くむことの方がずっと大切である。レイチェル・カーソンは『驚異の感覚』の中で、「子供にとっても親にとっても<感じる>ということは<知る>ということよりもずっと大切です。もろもろの事実が将来、知恵や知識を生み出す種子だとすれば、情緒や感覚は種子を育む土壌です。幼児期はこの土壌をつくる時です。美しさや未知なるものへの感動、思いやり、愛情、哀れみといった感覚がひとたび呼び起こされれば、子供は、その対象となるものについて知識を求めるようになるはずです。こうした知識欲求は、長続きします。消化する能力がまだ備わっていない子供に知識を鵜呑みにさせるよりも、むしろ子供が知りたがるようになる道を切り開いてやることの方が、はるかに大切ではないでしょうか。」と述べている。

大人が考え期待する子供像や、道徳的内容、教訓的内容のものではなく子供の感性に訴え子供が自由な想像力を働かせて楽しめる絵本こそが、子供が存在を感ずる絵本ではないだろうか。一過性のものではなく、心の深い所に真理とか人生の知恵とかいった、目には見えないけれども何時か汲めども尽きぬ心の泉となるべく、幼い魂の何処かに蓄えられる、そんな存在感のある絵本と出会うことがとりもなおさず、絵本を味わう喜び・醍醐味を知る事であり、いいものとそうでない物とを見分ける力を養ってくれるのである。そのことが、子供の心の成長を支えてくれるのだと思う。

（3）　幼稚園教育における絵本の位置づけの歴史

昭和 22年	学校教育法第７８条 「言語の使い方を正しく導き、童話、絵本などに対する興味を養うこと」
昭和 23年	保育要領として ①お話し ②絵本、お話し、音楽、唱歌、などは、幼児の遊びの経験を、豊かにするものとして、取り上げられる。
昭和 31年	幼稚園教育要領の具体的事項 ①言葉を正しく使い、童話や、絵本などに興味を持つようになる。 ②童話を喜んで、きくようになる。 ③興味を持って、絵本等を、見たり、絵について話したりする。
昭和 35年	幼稚園教育指導書言語編 ①絵本を楽しむ(第三節) ②紙芝居、劇、幻燈、映画等を楽しむ“絵本の扱いを独立させています。
昭和 39年	幼稚園教育要領 ①絵本、紙芝居等に親しみ、想像力を豊かにする。 ②絵本、紙芝居、放送などを、喜んで見たり、聞いたりする。 ③絵本、および紙芝居、スライド、放送等の視聴覚教材を、精選し、喜んで見たり聞いたりするような、態度を、養うと共に、幼児の経験を広め、豊かな情緒を養うようにすること。
昭和 45年	幼稚園教育要領指導書言語編 経験や活動の例 話し合い、ごっこ、言語あそび、絵本、紙芝居、童話、劇的な活動、紙人形を使ってあそぶ、テレビ、ラジオ等。
平成 元年	幼稚園教育要領の言語領域の中で ①言語を聞こうとする意欲や、態度を育て、言葉に対する感覚を養う。 ②絵本や、物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。 ③絵本や、物語などに数多く出会い、イメージを持つことができるようにする。
平成 12年	①経験した事や考えた事などを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。 ★昭和２２年の学校教育法から、今日に至るまで、絵本は、幼稚園教育要領の中でいつの時代でも重要な位置をしめてきたのである。

※絵本による幼児教育のねらいや、内容も、時代と共に変化しています

昭和２２年 ・・・・・・・・ 絵本に興味を持たせる。

昭和２３年 ・・・・・・・・ 遊びの経験を、豊かにするものとして、絵本があげられる。

昭和３１年 ・・・・・・・・ 絵本は楽しむもの。

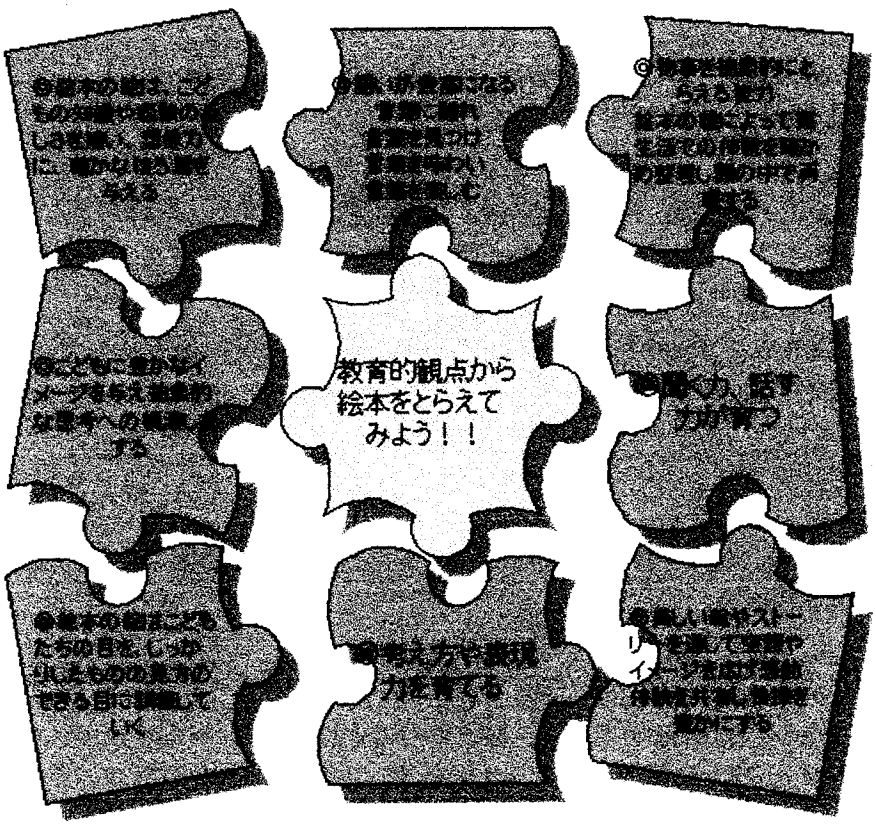
昭和３９年 ・・・・・・・・ 絵本は、想像力を豊かなにする内容や、筋がわかるようにする
豊かな情操を養うようにする。

平成元年 ・・・・・・・・・・ 興味を持って聞き、想像する楽しさを、味わう。
絵本や、物語に数多く出会い、豊かなイメージを持つことができるようにする。

平成１２年 ・・・・・・・・ 日常生活に必要な言葉が、分かるようになると共に絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

＊以上のことから幼児教育の中において絵本がいつの時代も重要視されてきたことが分かる。

（4） 絵本の教育的意義



<図１．絵本の教育的意義>

（5）園児の実態

◎一学期

○素直で明るい子が多く、好奇心が旺盛で戸外で活発に遊ぶ子が多く見られる。

○お話しを集中して聞いたり、物を作ったりすることや、自分の感じたことを相手に伝えることが苦手な子も見られる。

◎二学期

○週案に位置付けて、絵本の読み聞かせや絵本を貸し出しすることにより、絵本の好きな子が増え、「先生二冊借りていい」と聞く子も出てきた。

○子ども朝会・集会等を通して人の話しを静かに聞く態度も育ちつつある。

◎三学期

○お店やさんごっこを通して友達と工夫して品物を作ったり、相談しあったりする中で相手の考えや自分の意見も少しずつ伝えるようになってきた。

（6）絵本に関するアンケートから

「絵本に関するアンケート」からの考察

○調査目的：幼児期の教育は大きくは、家庭と幼稚園で行われ、両者は連携しつつ共同で一人一人の幼児を育むことが大切である。

本園では、園児の豊かな感性の発達をめざして、保育環境の一つに絵本環境を位置付け、絵本の読み聞かせを推進してきたが、家庭における絵本環境の状況を把握していなかった。

そこで、保護者の読み聞かせに対する意識や実態等を把握し、これからの保育に活かすための調査を実施した。

○調査実施日：平成13年1月10日

○調査対象：園児の父母94名

○サンプル数：58件

①問1「おとうさん、おかあさんは小さい時に読み聞かせしてもらったことがありますか」という問いに対して「はい」が43%で「いいえ」が57%であった。保護者自身の読み聞かせ体験が予想以上に豊富であることが分かった。

②問2「ご自分のお子さんに読み聞かせをしたいと思いますか」という問いに対して「はい」が98%で「いいえ」が2%であった。このことから、ほとんどの保護者の読み聞かせに対する関心度が高いことが伺える。

③問3「本がすきですか」という問に対して「はい」が91%で「いいえ」が9%であった。このことか

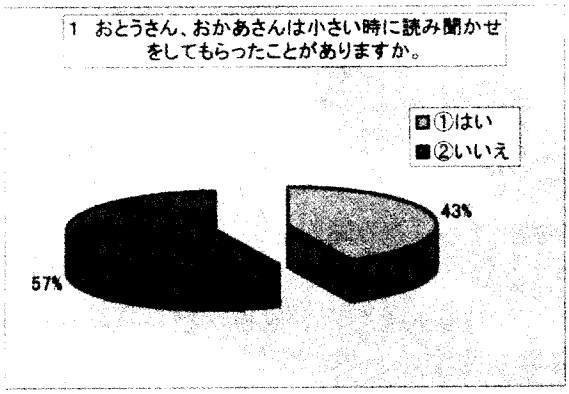
ら、ほとんどの保護者が本好きであるといえる。

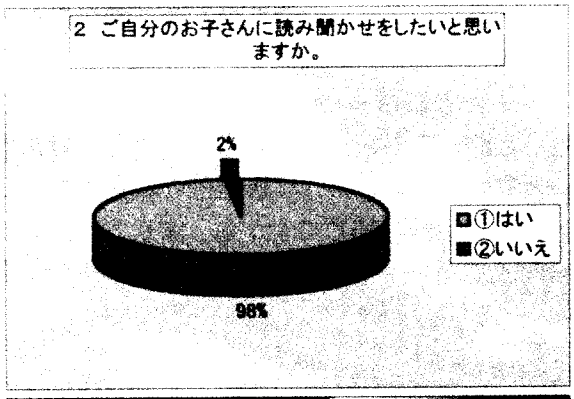
④問４「家庭で読み聞かせをしていますか」という問に対して読み聞かせに対する関心度は高いものの、「毎日している」と答えた保護者は 10%と低く、2%の幼児は家庭での読み聞かせの体験はない。

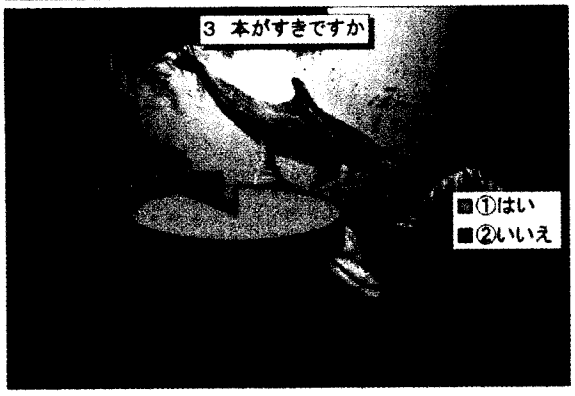
⑤問５「主に読み聞かせをするのはどなたですか」という問に対して「父親」が 15%で、「母親」が 69%であり、ほとんどの家庭で母親が担っている。

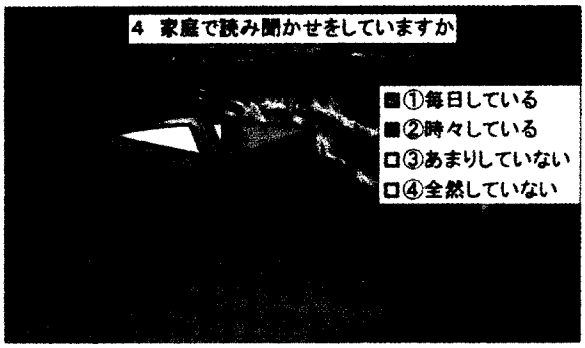
⑥問６「子育てに絵本は必要だと思いますか」という問に対して「はい」が 98%で「わからない」が 2%、「いいえ」と答えた保護者はいなかった。

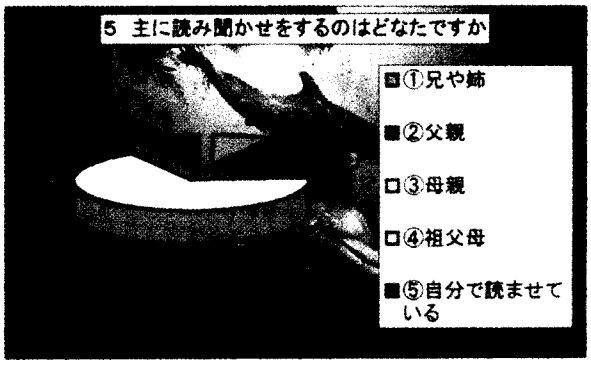
⑦問７「なぜ必要だと思いますか」という問に対して「心が育つ」と答えたのが 41%で「コミュニケーション」が 34%と続き、毎日の読み聞かせの必要性を理解していることが伺える。

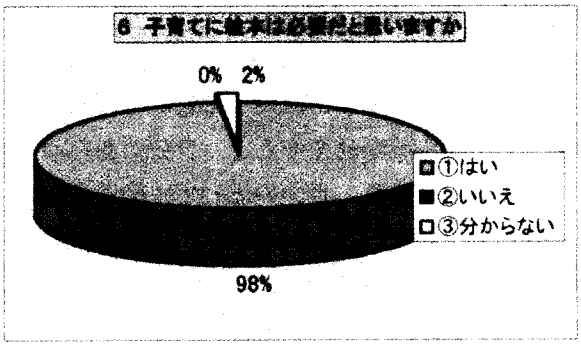


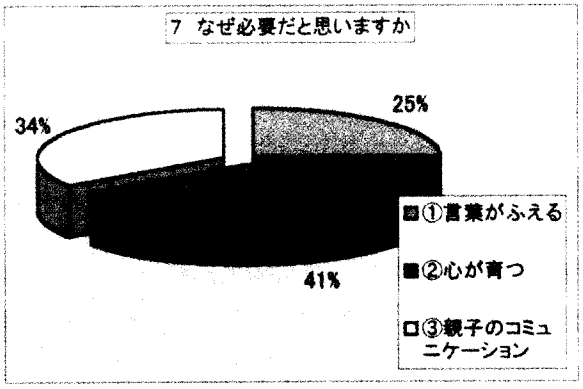












≪考察≫

ほとんどの保護者が、本好きであり子供の心の豊かな成長に絵本の果たす役割の大きさを理解している。しかし、読み聞かせを毎日実践している保護者は 10%と少ない。読み聞かせの本質は、子守唄や昔語りと同様に、子供にとってはかけがえのない心の触れ合いの体験であることを踏まえ、園と家庭で読み聞かせについて共通理解を深め実践につなげていきたい。

2　読み聞かせについて

（1）読み聞かせとは

子供の行動を見ていると、うまく出来る子、できない子、すばやい子、遅い子、はきはきしている子、無口な子、など、評価しようと思わなくても、すべては、見えてしまいます。顔の型が違うように、いろんな、人間がいてよいのだと本当に思える様に、なるには、時間が掛かります。特に文字や、数、音楽、絵・・・などは、小学校への準備教育として、教えたがる大人が多く、評価される。「教えない、評価しない保育」が読み聞かせなのです。年齢相応の思い、で、そのこ、そのこの、体験をとうした新鮮な驚きや、発見があり、自分なりの読みがある。障害があっても、そうでなくても大きい子も、小さい子も、目と、耳を、働かせて、絵を見、言葉（文）を聞いて、何を思っても、自由なのです。「読み聞かせ」は、生きた人間と人間の関係です。一人、一人の琴線に触れるような人間的かかわりこそが、保育の原点であり、それは、絵本の楽しさを、共有する毎日の読み聞かせの体験からも生まれる。心をこめて読み聞かせをすると，自分のあらゆる体験を出し切って，自分の思いで，絵本の世界にひたることができる。柔軟な，子供の頭の中には大人の計り知れない思いがある。

年齢による発達段階や，絵本体験の違い，絵本の内容にもよりますが、どんな子供でも、２ヶ月も読み聞かせを続ければ，満ち足りた表情で絵本の世界に浸り楽しめます。

子供がまったく，主体的に自分の思いをもって想像豊かに，絵本の世界に遊んでいる、これが感情、感性の教育であり，このような心の体験を通して得た知識こそが本物である。

『読み聞かせ・・・・このすばらしい世界』という、J，トレリース著の中でシカゴ教育長レースラブは、「もしも世の親たちが，学齢期前の我が子に、１日１５分読み聞かせをするようになれば、学校に革命をおこすことになるだう」というメッセージを送っている。

「読み聞かせとは」，言葉で子供をかわいがるという人間独自の子供のかわいがり方だと思う。子供は、いろいろな表現をすると思うが「絵本，読んで」――ということは「かわいがって」と、いっているのでは？と思う。大昔の動物や植物が地中海に埋もれて，石油や，石炭になり，人々の暮らしのエネルギー源になっているように、読んでもらった本の楽しさが，長い人生を生きるエネルギー源になると思う。一緒に，本を読む(読み聞かせ)ということは，ひとつの世界を共有すること・・・

★　心をふれ合わせることである。

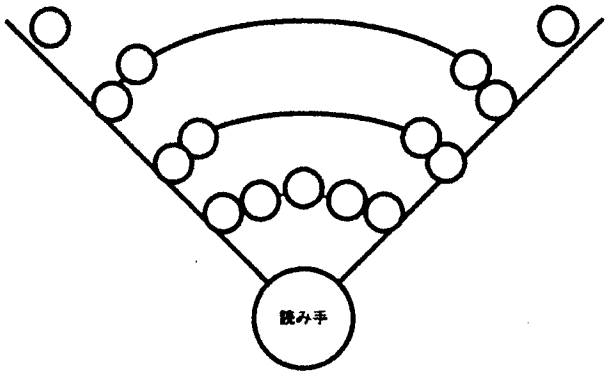
（2）読み聞かせを盛り上げる工夫

①　読み聞かせの体形

例

教室での「読み聞かせ」(絵本)の体形(例)

（できるだけ前の方へ寄せる）



※教室での「読み聞かせ」（絵本）の体形（例）

１０～２０人くらいの規模が読み手の声が聞き取りやすく、本の絵等が見えやすい。

クラスのなかには、いつも前の方で聞きたがる子、視力の弱い子、騒がしい子、様々です。そのクラスの実情に合った方法でどの子も落ち着いて聞くことが出来るような、態勢を考えないといけないのだが、学級担任の教室であれば、対象者はいつも同じですから、座り方を決めておけばスムーズにいくのではと思う。

② 場所に合った読み聞かせの工夫

教室以外の例えば、

【和室の時】

下が畳(床)なので、全員座らせて、落ち着いた雰囲気で出来るが、読み手は、聞き手の人数によって直接床に座るか、椅子に座るか、立ってするかを、考えて工夫することが大切である。

【屋外の時】

木陰で聞き手が太陽を背にするようにして、本の絵を見やすくする配慮が必要である。

③ 周りの騒音を遮る

音に対する対策は大切です。

子供たちは音や、動くものなどに敏感に反応する。集中する子、周囲に着が散ってしまう子，と、一人ひとりの子供を見ていくと、かなり個人差がある。本の見やすい明るさの調整や、外部の音や、動くものなどを、考慮し工夫することが必要である。

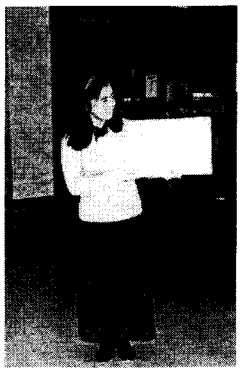
④ 読み聞かせをする時の本の持ち方

読み聞かせを立って行う時に、読み手の体が左右に揺れると子供たちは、集中して聞きにくいので、本の持ち方の配慮が必要である。

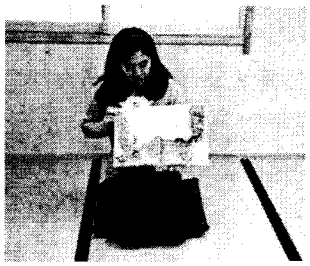
「読み聞かせ」をする時の本の持ち方は、本の種類や、大きさによっても違ってきますが一般敵に体の右に置いたり、体の中央に置いたり、体の左に置いたりと、読み手がやりやすい方法で行うのが、いいといわれている。

ただ、本を体の前に置く方法は、実際やってみればわかるが、字を上から見る訳ですから、読みにくいのだが、本を体の左右に置くより安定し、聞き手の反応が見やすいという利点がある。そして読み手と聞き手の距離を感じさせないことが、「読み聞かせ」独特の一体感のある雰囲気がつくれる。

※本を体の前に置いて行う「読み聞かせ」



※本を体の横に置いて行う「読み聞かせ」



※和室で座って行う「読み聞かせ」

※椅子に座って行う「読み聞かせ」

（笹倉剛著「感性を磨く読み聞かせ」
１９９９年。）

⑤読み聞かせをする本の選び方

子供の興味、関心がどのようなところにあるかなどを考慮することが大切である。

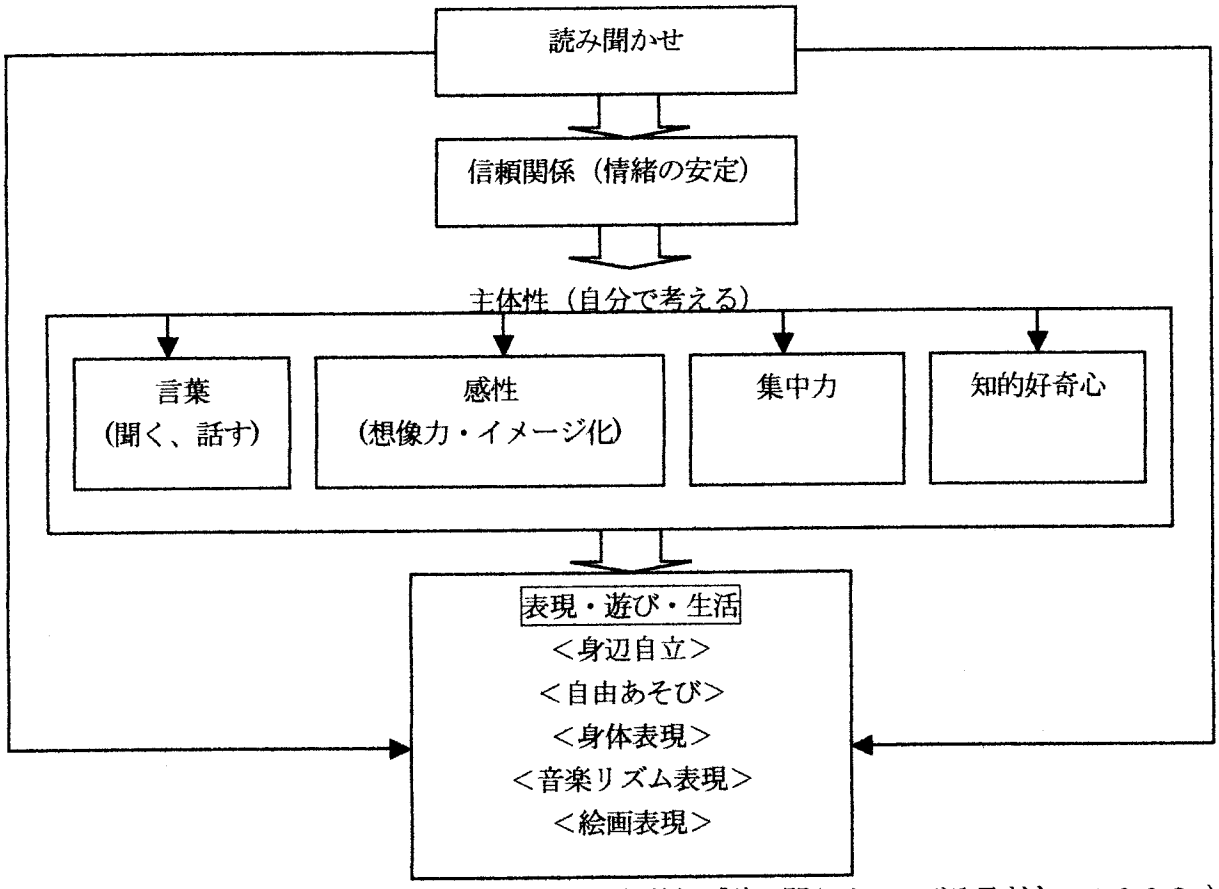
例えば、学年初めの時は、友達同士、お互いに充分知り合っていないので「友達」(友情)に関する作品、夢や、希望の持てる作品等がよいのではと思われる。

また、季節や、行事にあった本の選び方も大切である。身近で季節的なテーマを取り入れて読み聞かせを行うことは、本に対する興味や、関心が増してくる。次にエッツの「もりのなか」のように絵と文が一つの本として調和していることも魅力を感じさせる。絵本えらびのむつかしさを思うのですが、やはり子供たちの発達段階や、絵本体験、興味関心が大切な基準になるのでは、ないだろうか。

読み聞かせをする時には、本の読み方、開き方、めくりかた、読む速度、間の取り方等を工夫し子供たちが、自分の感性で、お話しの世界を自分なりに感じ、イメージを膨らませていけるような気持ちで行うことが大切なのでは、ないかと考える。

読み聞かせの導入もわすれてはならないと思う・読み聞かせをする時、その本に関する話を少ししておくと、抵抗なくお話の世界へ入っていける。例えば『１００万回生きたねこ』の読み聞かせをする時「もし生まれ変わるとすると、何になりたいですか？」などと前置きをしておいて、「今日は、１００万回も同じ生き物に生まれ変わったお話をします。」というふうにはじめるとより効果的だと思われる。読み聞かせは、読み手と、聞き手の心が、一つにならないと楽しくないものになる。疲れすぎていて集中力がないとき、学級に問題が起きて混乱している時など、その場に応じて臨機応変に対応しないと、失敗することも少なくない。聞くということは、本来、集中力を伴うものなのである。読み手の気持ちだけで、強引にやっても、子供は、集中できない。例えば、隣の友達といたずらしたり、後ろや横を向いたりしてざわつくこともある。そのことから、読み聞かせをする前に子供の心理状態を把握することが大切であると考える。

（３）　読み聞かせで育つもの



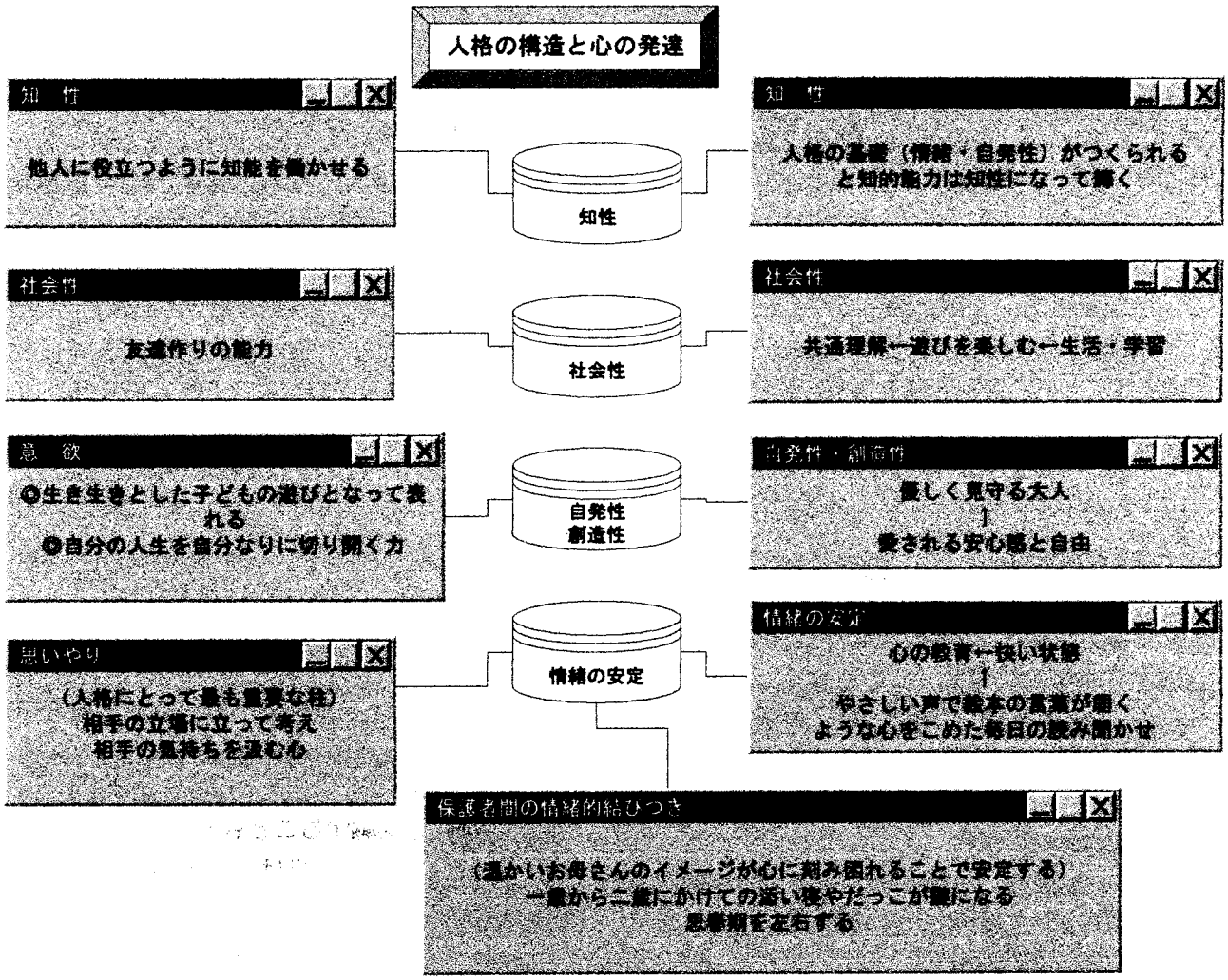
＜図２.読み聞かせで育つもの＞（平井信義編「読み聞かせでのびる子ども」１９９３。）

（4）幼稚園教育要領と読み聞かせ

幼稚園教育要領の言葉の領域に「絵本や物語に親しむ」と書いてあります。親しむとはどうすればよいのか？その方法として読み聞かせがあります。絵本は、大人が読み聞かせるものです。どんなによい絵本であっても「読み聞かせ」という大人の関わりなしに子供は絵本をたのしむことは出来ない。

心を込めて読み聞かせてくれる大人が絵本にとっても、子供にとっても、欠くことの出来ない存在である。選び抜かれた絵本の言葉が「読み聞かせ」という大人の愛情に支えられて子供の耳に届く時、話し言葉の少ない語彙力の乏しい子供が「耳ことば」として受け止める。同時に絵本の絵が、言葉で表現出来ない細部の読みを助けてくれる。

（5）読み聞かせによる心の発達



<図３．読み聞かせによる心の発達>

3　感性について

（1）感性とは

感性というのは、身体的、生理的な感覚をもとにして外界の刺激を受け入れる能力であり、感覚的な感情(情緒)や、情念として外に現れることだといわれている。感動する心、発見する心、共感する心、人を思う心、やってみようとする心、確かめようとする心、自分を超えようとする心、創りだそうとする心、あらゆる心の世界、すべてが感性であると捉える。いろいろな表現方法があると思うが、美しいものを見て美しいと感じ、不正には、真剣に怒れる素朴な心、嬉しい時には跳び上がって喜び、悲しい時には声を上げて泣くこの素朴な人間性、自然を愛し、月や花を眺めて詩歌を創り、人を思う心のすばらしさを語る、それすべて感性のなせる事だと思う。教育要領の「表現」の中で「感性とは、身近な周囲の環境と関わりながら、不思議さや、面白さなどを見つけ、美しさ

や優しさ等を感じ、心を動かしている。その様な体験の様子や、心の動きを、自分の声や体の動き、あるいは、素材となるものなどを、仲立ちにして表現すること」とある。

感性とは、感じる力である。物を考える力の土台であり、認識することの基礎でもある。感性とは、日常生活の中で出会う様々な、事物や、現象、文化の中に潜んでいる美しさ、不思議さ、面白さ、優しさ等に気づく心ではないかと、受け止める。幼児期に、「気づく心を」を育てる一つの手だてとして、「絵本の読み聞かせ」がある。直接、間接の体験が豊かであればあるほど、気づく心も豊かになる。「絵本」は、幼児に体験を豊かにする機会をあたえる。体験ということの、本質的な基礎は、あくまでも直接体験であるが、直接体験には限りがある。※例えば、２０世紀に日本人として生まれた私たちは、他の時代に、他の国民として生まれる事の直接体験は、不可能で在るように・・・・直接体験の限界を克服してくれるのが間接体験です。絵本の世界で個々の幼児が何かに気づき心を動かしたり、自分なりに価値を発見し何かを思い描いたり、自分の気づかなかった物の見方や、感じ方を知ったり、絵本の登場人物や主人公に、自分の姿を重ね、イメージを膨らませて遊ぶ事で、直接体験では体験できないことを体験することができるのである。幼児の独特の感性を豊かにする手助けを「絵本」はしてくれる。「絵本」を通して多様な体験をすることでイマジネーションは、育てられ豊かな感性が培われるものと考える。

（2）幼児の感性の世界

幼児は、幼児独特の心性をもっている。幼児期は、情緒的で、主観的で、爆発的で、一過性であり、非生産的でもある。

例えば、３歳の子が、竹輪を見て、つまり外界からの刺激を自分の内に取り込んで、「好きだな」とか「うれしいな」「竹輪だったらいいのにな」という喜びや、願望の情緒を生気させているのは、感性の働きによるものである。また、４歳の子が、鳥小屋の中に転がっている桃を見て、「先生、チャボが、桃産んでいる。」「リュウ君、桃って何のこと？卵のことなんでしょう。」「桃ってば、卵も産んでいるけど、桃も産んでいるってばー。」「「ねえリュウ君、本当に桃なの？」「そうだよ３個も産んでるんだから。」という非科学的な思考をすることもある。また、ある時５歳のM君は、友達の作った、ダンボールの怪獣を見て「これ、なに？」「H君の作った怪獣だよ。」「これは、怪獣じゃないよ、電子レンジだよ。」そういうと、ちょうど目になっている部分を「ピッピッピッ」と押し、にこにこしながらダンボールの中に入っていく、中に入ると「チーン」と、言い「ゴハーン」と出てくる。

お花に水かけをしている５歳のＳ子ちゃん「先生、来てごらん。お花が笑っているよ。お水ありがとうって言っている。」と，嬉しそうに話す。

「ふーん！Ｓ子ちゃん、お花のお話しが聞こえるの？」「うん、聞こえるよ、だって心にお花咲いてるから。」「あっ、そう、じゃお花さんうれしいね、Ｓ子ちゃんの心の花、きっとまた咲いているよ、増えてるよ。」「うん、何本？」「きっと１０００本。」思わず抱きしめて「すてきなＳ子ちゃん大好き。」というと、にこにこして活動をつづける。「花咲き山」の絵本の読み聞かせで、一ついいことをしたら一つ心に花が咲くという、保育者の言葉の表現を自分なりに受け止めイメージをふくらませている。幼児は、自分の感じた事や見た事、あるいは、自分なりに想像して描いた世界を全て言葉で表現出きるわけではないが、具体的なイメージとして心の中に蓄積される。その蓄積されたイメージは、関連する情景やものなどに出会った時、刺激を受け、生き生きと想起され蘇えって来るのである。日常生活の中で、環境と関わり、気づき、心を動かしイメージを膨らませている心の動きが感性であると理解する。保育者が、感性を働かせて、子供の表現を受け止め、見つめ、感動し、共感することも大切になってくる。「おとぎ噺期にある子供は、遊びながら事物と共に生きている」（フレーベル）

子供は、おとぎ噺（絵本の世界）の中で人間になぞらえた事物や生物、あるいはその動きなどを、全て実際のように受け取り、事物や動植物にたいしても、人間にも、同じように語りかけている。想像に満ちたこの子供の感性を大切にしたい。

Ⅵ　保育実践

保育指導案

日時：平成13年1月31日

宜野湾市立普天間幼稚園

3組　男児１５　名，女児１６　名

指導者　城間ハル子

本時の展開

1　活動名　『かみなりむすめ』（斎藤隆介作）

パネルシアターを使った絵本の読み聞かせ

2　ねらい

①パネルシアターを活用した絵本の読み聞かせをすることで、絵本や物語に対する興味・関心を喚起する。

②パネルシアターの世界の中でイメージを膨らませ、主人公の立場や気持ちを思いやる感情体験を通して豊かな心情を育む。

3　保育仮説

①パネルシアターを活用することにより、ブラックパネルの醸し出す幻想的な世界が、子供の心に、不思議さや感動を憶えさせ、豊かな感性を育むことができるであろう。

②パネルシアターを活用することにより、視覚的にイメージを膨らませ、読み聞かせの世界にひたることができるであろう。

4　指導観

パネルシアターは、文字の読めない幼児に図形や絵人形で伝えていくことができ、アットホームな雰囲気で楽しめることが魅力である。また、パネル板に小さな絵が置かれ話を聞いたり、歌ったりするうちにいつの間にか演者と幼児の間に暖かな関係が育っていく教材である。パネルシアターを通した読み聞かせをすることで、無意識のうちに主人公と自分の姿を重ね、主人公のすることを心の中で体験させたい。また、パネルを仲立ちとして心を触れ合わせ、パネル板に写る絵本の世界で、それぞれの持っている限りの感性を出して、自分なりの思いで想像したり、イメージすることを楽しませたい。

5　教材観

斉藤文学は、一貫して優しさがテーマになっている。『モチモチの木』や『花咲き山』等、どれも人の優しさが作品を貫き、そして子供の立場で描かれている。

この『かみなりむすめ』という絵本の内容も、子供たちの生活体験と重なり、主人公と思いを共有したり、共感できる作品であり、人と人の間に生まれる、いたわりや思いやり、優しさが感じ取れる絵本である。

6　三組園児の実態

◎一学期

○各クラスが交流する中で、外遊びを好み、固定遊具、砂遊び、せみとり、むし探し等、ほこりだらけになりながらもたのしんでいる。

○先生の側で安定している子もいるが花の咲いている事に気づいたり、小さな虫をを探す事に夢中になる姿が見られる。

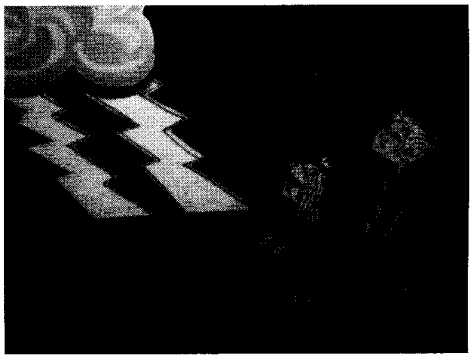
◎二学期

○障害を持つているM　君の世話をさりげなく当たり前のようにやってのける暖かい心を持っている子が多い。

○休んでいた子が出て来ると「だいじょうぶ？」と声掛けをしたりして優しい。

◎三学期

○好きな友達同士のかたまりが出来ている。やりたい遊びの違い、物の取り合いなどトラブルもあるが自分達で解決している。

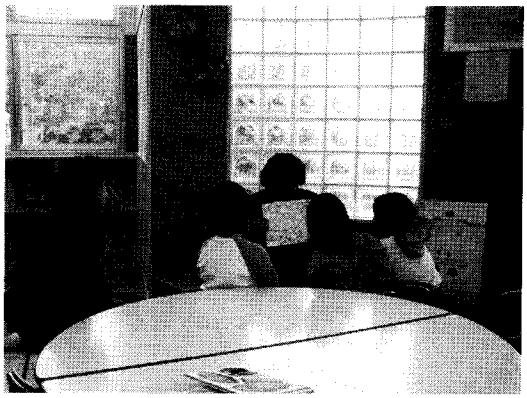
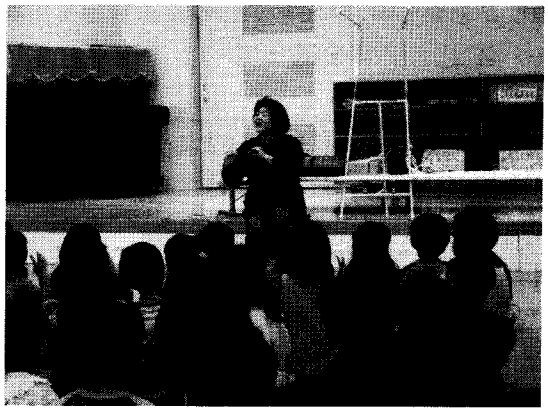


7 保育の流れ（日案）

ねらい	○パネルシアターを楽しむ。　○友達とルールを考えながら遊びを楽しむ。	内　容	友達と遊びの中で，自分の思ったことを，相手に伝えたり，相手の話を聞いたりして，遊びを進める。

時　刻	予想される幼児の活動	環境の構成と援助
8:30	[redacted]	[redacted] ○遊んだ後は，保育者と一緒に片づけをしながら話ましたり聞めたりして，片付いた後の心地よさを共感する。 ○パネルシアターの不思議さや楽しさを気づかせる。 幼人形と幼児の間に暖かな関係が育っていくようにむをこめて演じる。 ○車に気をつけ，寄り道しないで帰るよう言葉かけをする。
9:30	○[redacted] 片付けをやる気出た子は自分の部屋で帰つ	[redacted]
9:50	○ホールへ集まる　みんなでパネルシアターを見る	[redacted]
10:30	○部屋へ戻る シャワーを浴び	[redacted]
12:00	○降園 降園方法の確認 車に気をつけて帰る	[redacted]
評価		

8　本時の実践記録

※朝の出会いの中で 絵本の読み聞かせをするよ。聞きたい人絵本室に来てね。」 （遊びを傍観している子供たちに声をかける。） Ｆちゃんがからすのパンやさんを選ぶ。 読み聞かせを始めると、絵本の中にすぐ入ってきた。 自分が山に行った経験を想起し、「もしかしたらあの山にもカラスがいたかも知れない」とイメージした話しを語り始めた。「Ｆが行った山もこんなだった。」「カラスのぱんやさん見つけなかった？」「うん、あったよ」 「私はこれが好き」「たべたいね」「うん、おいしそう」	
※学級のみんなと（３組） 読み聞かせをするために、何度か学級に入っているので学級の雰囲気は分かっているが、担任の変わりは始めてである。信頼関係を確立するために、手遊びを楽しんだり、お休みの子に思いをはせたり、これからの日程を話したりする。一人一人の思いも発表という形をとってさせてみたのだが、以外に多くて〆切をしなければならなかった。 絵本の好きな学級なので、パネルシアターの話しにも興味を示して、見たことがあるとか、内容を話したりしている。 ※みんなよっといで（ホールでみんなで集まって『かみなりむすめ』のパネルシアターを観る）	

幼児の姿	環境と援助
・みんなで、よく知っている「花咲山」の絵本の話しを聞いたり、手遊びをしたりして雰囲気を楽しむ。 ・　２，３日前に読み聞かせしてもらった「かみなりむすめ」の話を聞いてイメージを膨らます。 ・　あ、見たことある。 ・　あおい光がでている。 ・　ハル子先生が読んでいた絵本とやっぱり一緒さ。 ・　周りの友達とおしゃべりをしたりして、落ち着かないＡ君やＢ君も心の耳は傾けているのか「おしかがあしかになったらどうするの？」等という。 ・　ブラックパネルは初めてなので圧倒されている子もいる。かみなりが落ちる場面や<おしか>が雲の上に引き上げられていく場面等では「ハア～」とか「ワアー」とか声を発している子もいる。 ・　パネルに近い場所に座っている子が「せっせっせ」をして遊び始める。	・読み手と聞き手の心がひとつになるように手遊びをしたりみんなの好きな絵本のはなしをしたりして雰囲気づくりをする。 ・同じ作家の絵本であることを説明する。 ・「かみなりむすめ」の絵本を工夫してパネルシアターを作ったことに気づかせる。 ・照明や、パネルの位置、高さを考え、どの子からも見えるようにする。 ・集中できる雰囲気づくりをする。 ・じっくり見ることが出来るように場面に応じて、声の強弱や抑揚に注意して読み聞かせる。 ・難しい語彙や聞き取れない表現でも書いてある通り読む。 ・子供のペースを考えながらよむ。 ・演じ終えたら余韻を大切にするために、パネルをそのままにしておく。 ・パネルに触れることでパネルの楽しさや不思議さに気づいて欲しい。

＜本時の実践記録の考察＞

○薄暗い中での子供の表情は、あまり見えなかったがその子なりの感性で楽しめたと思う。

○ブラックシアターの幻想的な画面と物語の内容が重なり幼児の心への響きも感じられ、絵本の読み聞かせと違った感動体験が出来たと思う。

○室内を暗くして環境を整えブラックシアターを演じたことが、幼児の興味関心を高め物語の中に引き込む効果があったと思う。パネルの舞台の高さや照明のタイミングの工夫をすれば一層効果があったのでは、と思う。絵本の読み聞かせは、幼児との暖かい関係と雰囲気づくりが大切だと改めて考える

○「おしか」がかみなりおやじにおしりをペンペンされお仕置きを受けている場面をじーとくいいるように見ている幼児の表情から、「遊んだからいいんだ！」とがまんしている「おしか」の思いを共有しているように思う。このような絵本の読み聞かせを積み重ね、感動体験を心に刻むことが生きる力の支えになると考える。

○毎日の遊びの中で子供達が「おしか」の大好きだった「せっせっせ」をして遊ぶようになったことは、絵本の世界を楽しみ、「おしか」の心に自分を重ねているのだと思う。

事例１　Ｋ君の変容を追って

○入園当初の様子

・オオム返しがある。(「K君おはよう誰ときたの？」「だれときたの？」「元気ですか・」「げんきですか？」「お名前は？」「おなまえは？」「Kでしょう」「Kでしょう」)
・２語文しか話せない(お母さんいた。、水飲む、)
・話はしないが指示が分かる。理解出来ない時はそのままの状態で援助を待っている。
・優しい声で一方的に話す。
・周りに興味を持たず周りに関係なく一人で好きな遊びを楽しんでいる。
・会話が続かない（「K君折紙をしているの？」「・・・・」「何作っているの？」「にいにいがさー・・・・」）
・独り言を言う。
・周りの環境や友達とのかかわりが弱い。

○５月頃の様子

５月後半頃から言語を育てようと母親と連絡を取りながら絵本の読み聞かせをはじめる。

好きな絵本	保育者や保護者の手立て	変容
『ザリガニ』	○ザリガニに餌をあげる仕事をさせる。	「チョキチョキ」といいながらかにのまねをする。
『カバくん』	○「かば君の口大きいね。K君のお口は？・・」（言葉を引き出したい。）	よく話すようになったが一方的に話すので相手に通じない。
『像の図鑑』	○保護者が象さん公園へ連れて行く。（像のイメージを具体的にする為）	２語文を話す（お母さんと行く。、何処へ。、ユニオンへ）

・保育者の毎日の読み聞かせを楽しみに待つようになって来た。
・少しづつ、いろいろなこと、周りの事に興味を示してきた。
・文字に興味を持ち、情緒的障害を持つM君のことを気にするようになる。(M君泣いているとか、M君もできる？とか)

※保育者の毎日の読み聞かせが効を奏したのか物語絵本も選ぶようになってきた。

○９月～１１月頃の様子

『かばくん』 『それいけロボット号』 『こぐまちゃんシリーズ』 『桃太郎』	園で読み聞かせた絵本の内容を家でお話しできるか連絡を取り合う。 友達や周りとの関わりを多く体験させる。 家での読み聞かせの時間（親子共有の時間）をたっぷり取るようにする。	・発想、発見がゆたかになり遊びが、広がってきた。 ・言語が豊かになって、片付けの時にまだ遊んでいる友達を観て「今は掃除」と教える。 ・絵がきれいだったり、色がたくさんある本を好む。 ・　物語のあら筋を話せるようになる。「桃太郎強いな」と感想を言う。
『おおきなかぶ』 『３びきやぎのがらがらどん』	いろいろなジャンルの絵本を意識的に読み聞かせる。 ・『バーバパパ』・『クレリア』 ・『かえるがみえる』・ ・『からすのぱんやさん』 ・『さっちゃんのまほうの手』	「うんとこしょ・どっこいしょ」の繰り返しの言葉にリズムをつけて歌う。小学校のアスレチックで遊んでいて、つり橋を渡るとき「ガタン・ゴトン、ガタン・ゴトン大きなやぎ」といいながら遊ぶ

○１月頃の様子

「からすのパンやさん」の読み聞かせのあと粘土遊びをしながら「へびパンを造る」とおおはりきり、「おいしいへびパン」と歌いながら絵本の世界で遊んでいる。
自分から保育者を絵本室に誘うようになってきた。「これー」といって絵本を選んで待っている。
『３びきのやぎのがらがらどん』と『こぐまちゃんシリーズ』の絵本を毎日交互に選ぶ。
「そうそう」「これやぎのお話」「こわいよー・・・・うんそう」絵本のページを自分で捲りながらうなづいている。なぞなぞ遊びのとき「チルチルとミチルが探している鳥はなに？」と言うとＫ君自信満々で「ラッパ」と元気な声で答える。答えは、違っていたけど皆の輪の中に積極的に参加している姿に発達を見る。
保育者や絵本を仲立ちにして友達や周りにも関わりが持てるようになりいろいろな遊びに挑戦している。
降園後も園での友達とお互いの家を訪ねたりして関わりを深めている。
会話もスムーズに交わせるようになり特別な手立てをあまり必要としなくなってきた。

お母さんの感想

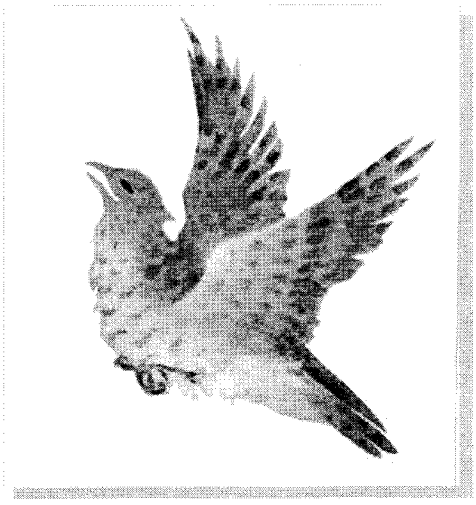
・２語文しか話せなかったが絵本の読み聞かせで言葉の数が増えた。
・本人も絵本の一節を覚えていて話したり、絵本の中の繰り返し出て来る言葉を、家で遊びながら言う事が多くなって驚かされる。
・友達も増えて一人では何処にも行けなかったのに、いまは、幼稚園にも一人で行くと言い出してとてもたくましくなった。
・家で「こぐまちゃんシリーズ」を声をだして読んでいる。
・　Ｋ君のおかげで私も絵本が好きになった。

＜事例１の考察＞

幼稚園と母親が早くから連携して絵本の読み聞かせをしたのがよかった。
科学絵本から物語絵本へ自然体で移行し読み聞かせをすることで保育者との信頼関係を築いたことは、よかった。意思表示をするようになりコミニケーションが取れ、園生活がスムーズに流れはじめると、友達との関わりに発展していった。読み聞かせを通して絵本の世界で遊ぶことを繰り返していくことで、イメージする力が育ち発想発見が豊かになってきたと思われる。絵本を仲立ちにして保育者や友達と話すことは、心を豊かにし、情緒の安定を図ったと思う。保育者や母親とのたった１５分の時間の共有、感動の共有、心の触れ合いがK君の心の発達を育くんだのだと思う。K君の発達段階を考慮した読み聞かせをしたことで、K君は、絵本の言葉が自分の言葉として、はっきり言えるようになり自分の意思をしっかり伝えられる言語能力を培ったと考える。

事例２　「幼い日―絵本と出会う」２２歳のＴさんの絵本体験

３年生の時に母から読み聞かせをしてもらった、忘れられない１冊の絵本がある。
いつも思い出している訳ではないが、今日のように心の話とか、子供の話とかになるとこの絵本しかない。
「『押し入れの冒険』も好きだったけど一度押し入れに閉じ込められる罰をされた時から怖い本になってしまった。押し入れにいれられた時あの絵本を思い出して本当に怖かった。」という。
「あの本『よだかの星』を読んで上げたらいいのに‥‥そしたら虐めとか、仲間外れは、いけないことだと絶対分かるよ。」
「ふーん、３年生の時に読み聞かせしてもらったっていうけど、よく覚えているね。」
「宮沢賢治の『よだかの星』忘れないよ。あの時俺泣いたもの」
「どうして泣いたの？悲しい物語だったっけ？」
「淋しくて、怖くて、死ぬってこんなに淋しいんだと思った。死ぬって怖いなーとはじめて思った。」
「すごいね、そうなんだ。」
「鳥に例えてあるから幼稚園生でも理解出来ると思うよ。幼稚園生からああいう本を読み聞かせしていたら、虐めとかなくなるよ。」
「そうかなー３年生とは、又ちがうんじゃない？」
「うーん、感じ方は、やはり違うかもね‥‥あの頃母は、『いっぱいのかけそば』って言う本を見て泣いていたけど、俺は、『いっぱいのかけそば』より『よだかの星』が可哀想だと思ったから『いっぱいのかけそば』の話しを母から聞いた時、もっと可哀想な事があるって、抗議した事を憶えている。」
「年齢かな？あるいは、貴方もお母さんもそれぞれが自分の生活に身近な話しだったかもね？」
「絵本ばかりの影響ではないかもしれないが、俺は、人を虐めたり仲間外れにするような事は、しなかった。」



＜事例２の考察＞

発達段階に応じた読み聞かせが考えられる。元上野動物園園長の中川志郎氏の述べる人間の発達過程における一つの過程である「子供グループの時期」にＴさんは、丁度『よだかの星』の絵本に、であったのではないだろうか。親よりも、先生よりも、好きな食べ物よりも何よりも、「友達」が大事、友達が居ないと生きていけない、友達に価値観を感じる発達期に主人公である＜よだか＞と自分の姿をきっとかさねあわせたのであろう。＜よだか＞の境遇に深々とした寂しさを思ったのでしょう。彼が言う様に絵本ばかりの影響ではないかも知れないが、Ｔ君の心の育ち、価値観、物の見方や考え方の優しさ、感性等、絵本は彼のパーソナリティーの形成を助けたのだと思う。又、叱ったり、躾の為に絵本を利用しては、いけない事を改めて学ばせてもらった。『押し入れの冒険』のようなすばらしい絵本も出会い方で、心を削ぎ落としてしまう恐れがあることに保育者として大人としての責任の重さを感じた。

Ⅶ　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

（1）理論を研究していく事で漠然と捉えていた「絵本」や「読み聞かせ」の素晴らしさや奥の深さに触れる事ができた。

（2）読み聞かせを積み重ねることは、幼児の言語感覚を育て自分の思った事や感じた事を表現して行こうとする意欲や態度を育てるのに有効である事が分かった。

（3）今日は、「Ｒ君の為に選んだ本を読もうね」と言う読み聞かせをした時、私語が多く集中力の乏しいＲ君が照れながらも絵本の世界に引き込まれているのを感じた時一人一人の子供の思い，生活環境、発達段階を考慮した読み聞かせの大切さを感じた。

（4）「言葉で抱っこ」「目で抱っこ」「心で抱っこ」をモットーにしているが「読み聞かせ」は、「言葉で子供を可愛がる人間独自の子供の可愛がり方」＝「言葉で抱っこ」である事を改めて感じた。

（5）「読み聞かせ」を楽しませることは、山野に降った雨が地中に沁み込んで植物の根を潤し続けるように何年も子供の心の根を潤し続けるらしい事が分かった。

（6）ジム・トレリースの「ランナーが一朝一夕に忍耐力をつける事が出来ないように、聞き手も一朝一夕に人の話を聞く忍耐力を身に付けることは、出来ない。ゆっくりと始め、徐徐に積み上げてゆく事が必要である。本を選ぶ時には、子供の知的、社会的、情緒的レベルを指針とする事である。」という言葉に自分の保育の反省をし「読み聞かせ」の仕方を学んだ。

2　今後の課題

（1）幼児との心のつながりを基盤として、幼児一人一人の発達に応じた絵本の選定、読み聞かせの雰囲気づくりの方法について今後さらに研究を深めていきたい。さらに教師自身がゆったりとした心で、ゆとりを持って幼児に接するよう心掛けていきたい。

（2）パネルや、エプロンシアター等の絵本教材を積極的に活用して、幼児と共に言葉の発達やイメージする力の育成について今後取り組んでいきたい。

（3）アンケート調査の結果を踏まえ園と家庭で読み聞かせの大切さや、実践法についての共通理解を深めていきたい。

（4）幼児にとって教師は生活のモデルである。教師の感性、好み等幼児の生活に反映していくものと心し、教材研究に研鑽していきたい。

3　終わりに

あっという間の６ヶ月間だったような気が致します。

障害のある子供の発達に於ける「読み聞かせ」の教育的効果を実証しているドロシー・バトラーの『クシュラの奇跡』や子供達の想像力を目覚めさせパーソナリテイーのバランス良い発達や言語能力を向上さ

せるために本を読み聞かせようと提唱しているジム・トレリースの著書に出会う機会を得、自分のこれまでの保育の振り返り、反省、そしてなぜ今読み聞かせなのか、なぜ今心の教育なのか、考える有意義な時間でした。６ヶ月間で学んだことをこれからの実践に生かしていけたらと思います。

懇切丁寧にご指導下さいました天妃幼稚園の名嘉萬里子先生、研究所の新垣英司先生、言い尽くせぬ思いでいっぱいです。ほんとうにお世話になりました。いつも優しい眼差しで励まして下さいました研究所所長始め職員の皆様に感謝致します。そして私の背中を押して下さった普天間幼稚園の宮城ミツ子園長、共同研究者として協力して下さった普天間幼稚園の仲間の皆さん、何かと支えて下さった同期研究教員の先生方に感謝致します。ありがとうございました。

Ⅷ　引用文献・参考文献

1. 梅本妙子著　『絵本と保育』　エイデル研究所，1995。
2. 金子賢著　『ロールプレイング入門』　学事出版株式会社，1994。
3. 中村柾子著　『絵本はともだち』　福音館書店，1997。
4. 平井信義編　『読み聞かせでのびる子供』　エイデル研究所，1993。
5. 森上史郎編　『幼稚園教育要領解説』　フレーベル館，1999。
6. 文部省　『幼稚園教育要領解説』　フレーベル館，1999。
7. 河野重男編　『新しい幼稚園教育要領とその展開』　チャイルド本社，1990。
8. 笹倉剛著　『感性を磨く読み聞かせ』　北大路書房，1999。
9. ジム・トレリース著　『読み聞かせーこのすばらしい世界』高文献，1988。
10. 鈴木祥蔵編　『絵本でひろがる世界』　解放出版社　１９８０．

「イイネ」

鏡の中をのぞいてごらん
　素敵な自分に　出会えるよ・
自分の中で　自分の中で　自分の中で
　どこが好き？
鼻の下のほくろ＊　キリリとした目＊
　ちょっと大きい口＊
みんな　いいとこ　いっぱいあるね
　みんな違って　みんな　いい
（N・H・K「みんなのうた」より
　高氏圭子作・詩

「ひとりでに本を愛することを覚える子供などというのは、まずいない。誰かが、文字で書かれた言葉の素晴らしい世界へ、彼らを誘い込んでやらなくては、ならない。
誰かが、その世界へ行く道を教えてやらなくては、ならない。」
～～～オリバー・プレスコット『わが子に読み聞かせをする父親』より